

「埼玉にヌードルを茹で
る余裕はない。それで
も私はヌードル触手を
伸ばし続けます」と
Flying Spaghetti
Monsterは言った。
にえる

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

宇宙は空飛ぶスパゲッティ・モンスターによつて創造された。これは空飛ぶスパゲッティ・モンスターが大酒を飲んだ後の事であった。空飛ぶスパゲッティ・モンスターは偉大な十本のヌードル触手を操り、ヌードルを茹でた。その時、ヌードルが鍋で調理されていたことは万物の摂理だった。人の子よ、銀河系を見よ。星々の集まりが渦を巻いていることが分かるだろう。それはヌードルなのだ。渦巻く形を持つすべてをヌードルと見做せるのだから見える世界も見えない世界も鍋であるという事実に変わりはない。古代、鍋で調理されたヌードルはハリガネかバリカタばかりだった。しかし、現代のヌードルが多様な進化と独自の文化を持ち、硬さも自由自在なのは人の子らが繁栄し

たためだ。数多の鍋を操るには、空飛ぶスパゲッティ・モンスターのヌードル触手が足りなくなったのだ。そのことで空飛ぶスパゲッティ・モンスターが怒ることはない。神性な食物であるヌードルを、すべてのヌードル触手で抑えきれないほどの人の子らが食べることができるようになった時代を、喜ばずして何を喜ぶのだろうか。だが、悲しみは感じているだろう。古代の人の身長が低いのは空飛ぶスパゲッティ・モンスターの触手によつて頭を押さえられていたからであり、褒めるために頭を撫でていたからだ。現代人の背が高いのは人口増加により空飛ぶスパゲッティ・モンスターの触手の数が足りなくなつたからであると同時に、撫でるべき人の子らを褒めきれない事実でもある。人の子らよ、地に満ちよ。空飛ぶスパゲッティ・モンスターは権力を振りかざすために民衆を恐怖に陥れることもなければ、異教徒を地獄へと落とすこともない。毎週金曜日の祭日を忘れても問題は無いし、宗教の意に違反したからといって誰も殺さない。他の神を否定することもない。そして、あらゆるドグマを否定する。空飛ぶスパゲッティ・モンスターが存在しないという明確な証拠さえ提示されるのであれば、空飛ぶスパゲッティ・モンスターが存在しないという事さえ否定しない。人の子らから離れ、ただのヌードルへと戻るのだ。人の子よ、時折両の手を見返すのだ。その手でヌードルを茹で、貧困をなくし、病を治し、疲れを癒し、平和に生きて、隣人と手をつなぎ、愛しい人を燃えるように愛して、電話会社は電話の通話料を下げ、茨と薊の道を渴いたヌー

ドルで押し折るためにあるのを忘れないでほしい。ラーメン。

目次

空飛ぶスパゲッティ・モンスター	1
空飛ぶスパゲッティ・モンスター	19
空飛ぶスパゲッティ・モンスター	30

空飛ぶスパゲツテイ・モンスター1

— 1

俺は夢の中を自由に歩いてきた。いわゆる明晰夢というやつだろう。体はふわふわとしながらも形を保っている。

どこまで行けばいいのか、いつ目覚めるのか。疑問に思いながらも、非日常を楽しむかのように歩き回る。

歩くたびに、ゴムでできた床を踏んでいるかのような鈍い感覚を覚えた。不安定な足場だったが、歩いているうちに慣れてくると、違和感も忘れていった。

ふと、遠くに眩い光が灯っていることに気づいた。

「■を■■■■のです」

その光は俺に何かを語りかけている。なんだ、なんとやっているのか。語りかけているのか。

非日常を楽しむ気分には釣られてか、俺はその光と言葉が気になりだしていた。

目覚める気配も、夢が終わる予兆も無い。それならば、と俺は光へと歩むことにした。

「■を■でるのです」

近づくにつれて光が徐々に大きくなり、再び声が聞こえた頃には視界いっぱい広がっていた。

それは眩く、そして実に神々しかった。

俺はそれにどうしても近づきたくなっていた。声をきちんと聴きたくなっていた。

不意に脳裏へと奇妙な映像が浮かんで立ち止まった。それは光に魅了された自身の姿で、まるで火に吸い寄せられる虫のようでもあった。

今なら戻ることもできますよ、そんな言葉を耳元でささやかれた気がした。穏やかで優しい、慈愛溢れる声だった。

立ち止まって気づいたが、眩い光は俺の姿を影ごと掻き消していた。

進むか、戻るか。

ここまで来て戻るのか、ここまで来てしまったから進むのか。

見えない何かに強い決断を求められている、そんな予感がした。途中まで行ってやめるのならば、今戻ると変わらないことも何故か理解できた。半端は求められていな

い。今すぐに全てが決まるわけではないが、強い意志が歓迎されることも。

馬鹿らしい。結局はただの夢だ。俺の脳が見せているただの夢。

自分の夢から逃げて、どこへ進めるといふのだろう。

俺は決めた。このまま進もう。俺が決めたことだ、夢の中で、俺だけの意志で決めたことだ。

足があるのかわからない。感覚は消えていた。光で見ることすら出来ない。それでも進む。

俺にはわかる。進めばいい、間違っていない。この先だ。

すぐ傍だ。

だが、触れられるほどに近く、どこにいるのかわからないほどに遠い。

その時、より強い光が灯された。

なんと神々しいことか。

無意識に天使か神に近づいたのではないかと思つたほどだった。

そうして、光が弱くなり徐々に消えていくと、僅かずつ姿を現した。

幾本にも絡まった黄を帯びた髪、二つの茶褐色の玉、カタツムリが持つつぶらな瞳。

形容しがたき化け物だった。

「麺を茹でるのです」

何が天使だ、パスタじゃねーか！

「守護スパゲッティです」

スパゲッティかよ！

「太さにこだわりがあります」

知らんがな。

そこから視界が白んでいく。

この無駄な夢はどうやら時間切れを迎えたらしい。

無駄に歩き続け、ゴールはスパゲッティの集合体とは誰が予想できただろうか。

俺が無意識に求めているのはスパゲッティなのだろうか。

朝の陽ざしとともに目が覚めると、凄くよく寝れた気がした。

この日から毎日、化け物が夢に現れては見つめ合い、快適な寝起きを迎えることとな

る（未来を知っている者特有のそれっぽい文言）

— 2

夢で再び化け物と出会った。

絡まった麺、二つの茶褐色の玉、カタツムリが持つつぶらな瞳。かわいい瞳をしているような、そうでもないような。

俺の貧困な語彙では化け物としか表現できないが、もっと正しい名称があるのかもしれない。

「私です」

化け物がそう告げる。耳心地の良い美しい女性の声だ。穏やかで落ち着いている。

「お前だったのか。いつも粟をくれたのは」

「違います」

「なんと」

狐じゃないから違うだろうなって思ってたが、実際違ったようだ。

そうして視界が白んでいく。

以前よりも短い時間の接触だった。

やはり俺が無意識に求めているのはスパゲッティなのだろうか。

— 3

一日の疲れを癒すために早めに寝たのだが、すぐに夢を見ている感覚に陥った。今いるのは夢の世界だと理解できる。明晰夢というやつだろうか。

化け物が近すぎず、遠すぎず、絶妙にちょうどいい距離で浮いていた。

「私です」

語りかけてきた化け物に、どこで発声しているのかとくだらない疑問が浮かんだ。

「お前だったのか。こだまは」

「こだまでしょうか。いいえ、私です」

「お前だったのか、私は」

「私でしょうか。いいえ、こだまです」

「やはりこだま……」

視界が白んでいく。どうやらタイムアップが訪れたようだ。

名残惜しそうな雰囲気化け物を残し、俺は深い眠りへと入っていく。

経路上、ここからぐっすり眠れるのだ。

朝の陽ざしとともに目が覚めると、凄いよく寝れた気がした。

朝食代わりにインスタントラーメンを食べたが、ちよつと胃が変になった。

— 4

明晰夢だ（慣れたので端折り）

「私です」

なんかまた化け物がいた（知り合いのためフランク）

「お前だったのか。魔王の支配によって闇の帳で覆われし天空を光射す道を生み出すことで勇者を導き、遍く悪鬼による混沌の大地をノアなる者とその縁者と様々な種類の雌雄で選別された動物のみを残して神聖なる洪水で清め、灼熱の業火彩る風を涼やかな新緑で癒し、新たな世界を創造しようとした今俺が考えた僕が考えた最強の神様は」

「違います」

そう。じゃあ飽きたので私寝るね（飽きた人間特有の冷たさ）

朝の陽ざしとともに目が覚めると、凄いよく寝れた気がした。

夢の中で化け物がテレビを見ながら待っていた。見回してみると、なるほど俺の部屋だった。冷蔵庫からジュースを二本取り出し、一本を投げると、麺で構成された触手で受け取っていた。段々と互いに慣れを感じる。

化け物はジュース片手に（といっても触手は複数あつてそのうちの一本だけなので）ゆつくりと立ち上がる（麺を足に見立ててその体を持ち上げたため立ち上がったと感じた。もしかすると浮いているのかもしれない）と、真剣な瞳（おもちゃのような丸い瞳だが何故か真剣だと理解できた）で俺を見つめている。いつもとは違う、明晰夢特有のオーラ（なんかそんな感じの空気感）でわかる。

化け物はこのチャンスに物に出来るのか（他人事）

「ごめん待ったー？」と俺。

「いいえ。今きたところだから大丈夫です」と化け物。

「そう。じゃあ俺、テレビ見たら寝るわ」と俺。

深夜にやっていたラーメン特番を一緒に見て寝た。

朝の陽ざしとともに目が覚めると、凄いよく寝れた気がした。

居間の机に空き缶が二本置いてあつた。

— 6 —

帰宅すると、何かの気配を感じた。いつもと違う。だが慣れ親しんだ気配だ。実家に帰省したときに似ているかもしれない。

居間の扉を開ける。あの化け物がいた。俺に気づくとその化け物は律儀に身体（？）をこちらへと向けた。だが、テレビに強く興味を持つているのか片眼は流れているラーメン特番を、もう一方の眼は俺を捉えていた。

改めて見るとなんと奇天烈なのだろうか、よく誰しもが一度は迎える心霊現象や幽霊との邂逅とやらかと思案してみる。

「私は貴方の守護天使です」

守護天使！　なんと、彼奴はその見た目で天使だという。天使というのはもつと神々しいのではなからうか。両性だとか、姿は後光で見えないだとか聞いたことがある。そういえば天使というのは眼が沢山あつたり、羽根がいっぱいあつたり、そもそも人型が少なかつたかもしれない。

もしくは一般的に知られている羽根の生えている、それっぽい姿をしている可能性もある。

ここまで外れた姿では、信じるにも難しい。

「嘘をつきました。スパゲッティジョークです。実は守護スパゲッティです。なんとこれはミートボール」

守護スパゲッティ！ そんな存在がいるとは思わなかったし、きつと他人から言われたら信じなかっただろう。頬袋のように存在していた茶褐色の球体は、なるほどよく見ればミートボールだった。

しかし、スパゲッティ本人（人という表現はおかしいが本スパゲッティだと語呂が悪いため人を採用）から言われると成程、そういうのもアリだなと納得してしまうから不思議である。

そういえば守護霊がコクワガタで、本人よりも弱いため守ってあげなければいけないという与太話をネットで見たことがある。そう考えると、守護するのは人や動物どころか虫や食べ物でも問題ないのかもしれない。

そうなると思えば普段は見えなかったり居なかったりするという守護霊的なサムシングが夢や現実で接触してきたということは、俺の身に何か起きるといふ先触れなのだろうか。

「いえ、違います。守護スパゲッティとしてキャリアアップしていききたいと思っております、ご協力をお願いしたく」

キャリアアップ！ 守護霊としてキャリアを積み重ね、今後に生かしたいのだろうか。勤勉な守護霊である。俺はどうもぐうたらというか、自分で言うのもなんだが向上心があまり見られない人間だ。なんとというか、前向きな発言とか姿勢をちよつと見せられるだけで、どうもこのスパゲッティが何か立派な守護霊に見えてきてしまったのだから、俺は単純なのだろう。

しかし、簡単に肯定するには至らない。これで悪霊だつたりしたら「お前を呪い殺すのさ！」だなんてベタな展開が待っているのだろう。そうでなくても生贄などを求められたら堪らない。霊的な存在に約束事をするのはなるべく控えるべきだとネットで見たことがあった。崇られては困るといふ物。

とはいえ協力を願い出てくる守護霊という面白さと興味深さ、向上心は俺の心を撥つてくる。物によって協力を惜しまないかもしれないと思わせる旨味（スパゲッティなので旨味としたが、もしかすると凄みかもしれない）を持っている。

「ちよつと危ないかもれません」

危ないのか。そうなると対価や目的によつては協力できない可能性も出てくる。

俺が協力できないとなると他の協力を探す必要も出てくるかもしれない。段ボー

ルに入れて、捨てスパゲッティとして放置するのはどうだろうか。

ママ、ボクこの捨てスパゲッティに協力したいよ。ダメよ、元の場所に捨てスパゲッティしてきなさい。なんて会話が路上で交わされる未来もあり得る。

「キャリアアツプの目標ですが、他の幽霊などを倒して今よりも高位のスパゲッティとなります。最終的にはヌードル神を目指します」

スパゲッティが神！ あまりのスケールのでかさにブルリと来た。だが、スパゲッティの神とはいったい何なのだろうか。ヌードル神というのが正式の名称だったり、位階だったりするのもかもしれない。人間とは異なる文化構造もしているのだろうし、近い単語を当てはめているだけで実際は全く異なる事実もあり得る。そもそも自律行動している時点で高位のスパゲッティなのではないか。神とは、スパゲッティとは、うごご……。

絡まる思考はまるでスパゲッティのようだ。なぜ日本人の俺なのかというシンプルな疑問が浮かぶ。スパゲッティならイタリアとか、そういう場所で神になってもいいのではないか。

次はイタリア抜きでやろうぜ。

「疑問に思っているイタリアですが、あれは私を食べ物としか思っていないので。それに故郷はすでに偉いヌードル神がいます。偉い人の近くで頑張るのって嫌なのです。

ほら、わかるでしょう？」

イタリアはこんなスパゲッティもどきまでスパゲッティ認定しているのか、やっぱ本場は頭やべーな（偏見）

それはそれとして、スパゲッティの主張もわかる気がする。地方でそれなりに好きにやれるのに、わざわざ本社のお膝元で働くのは嫌と。わかる（わかる）心身が疲弊しそうだ。

だがキャリアアップなら近道になるのではないだろうか。本社の方が給料とか待遇が良いかもしれない。

「四文字フィーバーが過激な場所で、大して給料も良くないお仕事はちよつと……」

聞くところによると、地盤はあるとはいえ、一番偉いヌードル神や、それに準ずるスパゲッティに搾取されて中抜きされてしまいうらしい。さらに四文字しか認めない狭まった視界を持つ人間に弾劾されて焼きそばにされる可能性も高いという。

「それに比べると独立独歩とはいえ日本は良いです」とミートボールに疲れを浮かばせながらスパゲッティは言った。ナチュラルに疲れを読み取ったが、ミートボールに疲れを浮かばせるとは一体どんな状況なのだろうか。

「さて、協力していただく内容ですが、あまり難しくありません。悪魔を倒してもらえただけで結構です」

あまり難しくないと行ってからの、悪魔を倒すという無茶振り。やはり相互理解など不可能ではないだろうか。それとも悪魔を倒すのは実際のところ簡単だとも言えるのか。

テレビで苦勞しながらエクソシストが祓つたり、陰陽師が鬼に食わせたりにしているのを見たことはある。実際はそういう霊的なモノが見えたわけではないので、本音を言えば眉唾でもあつただけけれど。目の前のスパゲッティを見ていると、現実というものも案外あやふやなのだなどと考えさせられるものだ。

「悪魔を倒せるのか、そんな疑問を抱いたのでしよう。問題ありません。こつくりさんとか一人鬼ごっこを半端に行うことで弱い霊を呼び出してしばき倒せば良いのです」

俺のイメージしている悪魔というのは、七十二柱くらいいる連中なのだが、どうもそれだけではないようだ。聖書に出てくるような天使も悪魔、もつともらしい悪魔は当然の権利のように悪魔、悪霊も悪魔。

超自然的な存在は強弱に関わらず総じて悪魔だという。利害によって味方になることも敵になることもある流動的な存在は、人間にとつて悪魔的であるということなのだと。

「なので私も悪魔です。守護スパゲッティでもあります」

「いかがでしよう。ちよつとした非日常という甘美な誘惑に身を委ねてみませんか」

最初はファブリーズや塩、米で対応できる悪魔を退治することから始めるらしい。危険度で言えば、酔っ払いに絡まれたり、街中の素行不良者に襲われるより遥かに安全のようだ。wizに出てくるようなとんでもないスライムとの戦いがあたりしたら、全力で拒否するところだった。液体生物に呼吸を止められて陸上で溺死する俺、なんて不幸は受け入れられない現実なのだ。

話を聞いていると、有利なところからマウントを取って悪霊を退治する、ちよつと薄暗い趣味っぽいが悪くない。安全圏から勝利する喜びを得続けられるのは、どうしてもなかなか魅力的だ。

しかし、俺はまだ大事なことを聞いていない。対価だ。悪魔という非現実的な存在と戦うのなら、何か生きるのに有利な物が欲しい。

例えば……税の免除だとかIQ500だとか。いや、税の免除は欲しいがIQはそれほどでいいかもしれん。

「悪魔を倒すと換金する手間は必要ですが、お金が手に入ります。あと宝石」

なんか予想以上に生々しい対価だった。

ファブリーズ程度で除霊できる悪魔ははした金にしかないが、もつとステツプアップすると街単位でヌードル茹で放題を実施できるくらいだとか。いくらだよ、そ

れ。

「あなたの魅力次第で悪魔にモテます。悪魔というのは見目麗しい者も多いのです。怪異に魅了される者は溢れるほどに物語として伝わっているでしょう」

男も女も溺れるくらいには容姿が整っていて、下半身に都合の良い悪魔というのは多いようだ。悪魔ハーレムを作る男だけでなく、悪魔逆ハーレムを作る女もいるらしい。

悪魔逆ハーレムってパンチが効いてるな。傍から見たら事件性が増すというか。乙女ゲーで逆ハーレムを迎えた女性の主人公って夜の役割やばそうだな、というのが感想だ。俺様系とか王子様系とか、断つても夜の役割を強いてくるに違いない。二人とか三人なら耐えられ……いや、無理なのは。というか、下手すると五人とか六人だろう。一種の事件なのではないだろうか。夜の役割を果たす際には上の口と下の口、両手などを使って、男たちの下半身を満足させるわけで。そうなると、女性主人公は懸け橋みたいな役割が必要になるのではなからうか。気づけば男たちが互いの快楽を求めするために群がり、上と下に突っ込んでいたら男同士で目が合ったりする可能性もある。これはもうホモじゃないだろうか。女性主人公という懸け橋を使って仲立ちを得ることで、同性という垣根すら超えるのだ。しかもこいつらが精神的に満足するまでバブって来る可能性も高い。そうなると求められているのは伴侶としての立ち位置ではなくなり、親としての包容力だけかもしれない。逆ハーレムエンドというのは、実は母親エンドなの

かもしれない。私がお前らのママになるんだよ、みたいな。

「バニーガールみたいな女性悪魔もいますよ」

!!

「その胸は実に豊満だった、という可能性も高いですね」

!!!

「では協力をありがたく。今後ともよろしくお願いします」

現実だけでなく夢でも交流した親友のスパゲッティに協力を求められたら断れるわけがなかった。

ただ、今のところ一つだけ俺から要望があるのだ。

「なんでしようか。私にできることなら善処します」

思考を先読みするのは止めてもらえないだろうか。俺は未だに一言も発していないのだが。

「……今宵も良き夢を」

おい。

……おい。

白い霧とともに消えやがった～
q

空飛ぶスパゲッティ・モンスタ―2

— 7 —

守護スパゲッティに協力する旨を伝えて既に二週間ほど経ったが、未だに俺は悪魔と戦っていない。話を聞くに、悪魔は形式に囚われやすいという。特に人間が語り継いできた物語を元にした悪魔は姿かたちのみならず、持っている特性も引きずられてしまうようだ。力が弱い悪魔ほど出没する時間や儀式、対処法などにも縛られ、ちよつとした噂の影響も受けて変質ししまう可能性が高いらしい。高位の悪魔は噂など後付の影響によつて変質し難い代わりに、やはり紡がれてきた伝承などに強く縛られるようだ。

悪魔と戦っていない理由としてはシンプルに怖いためだ。未知への恐怖というのも大きく、行動を阻害する見えない圧力となつているようだった。知識の浅さが行動に移させない不安にも似た神経質な慎重さを抱かせていた。わからないまま危険物に触れる間抜けにはなりたいとは思わない。どうにかして克服、または許容できる程度まで

恐怖を抑制するには、やはり理解を深める必要があるのだろう。

知っているということは大きな武器になるはずだ。『幽霊の 正体見たり 枯れ尾花』という言葉もあるように、理解の範疇に収めてしまえば未知への脅威は幾らかは和らぐだろう。それと同時に、俺が戦うであろう悪魔は人間の影響を受けやすいほどに繊細だという。人のうわさ次第で簡単に変質する可能性も考慮しなければならぬ。すでに形となっている物語と人々の間で流れる物語、その共通項を見極めるとなると、どれだけ時間があっても足りない気がした。だが、目に見えない物への漠然とした恐怖は、俺に僅かばかりの疲労を蓄積させるのと同時に、奇妙な集中力を与えていた。

肩凝りと目の奥に疲れを感じ、ディスプレイから目を離す。思っていた以上に疲れていたのか、後頭部に鈍い痛みを感じた。目を閉じて、片手で目頭を揉みながら、ゆつくりと首を回す。腕を軽く回すと、ごりごりと重い音がした。数分ほど固まっていた部位を解し、ゆつくりと目を開く。ぼんやりとしていた視界が徐々に明瞭になっていく。ディスプレイには、掲示板で語られた都市伝説を綴ったサイトが映っている。こういったオカルトについてまとめているサイトを巡るのが日課となりつつあった。寝る前には更新されていないか一通り見て回る程度には。

初めは命が懸かっているため、ある種の義務感に似た感情を持って調べていた。しかし、調べ始めると意外と面白い話が多く、読むのが趣味になるまでにそう時間はかから

なかった。恐怖を煽る呪いの話もあれば、それだけでなく人間らしさに溢れた間抜けな幽霊の話、オチもヤマもなくただ川を流れる幽霊の話、亡くなった親族が最後に会いに来るしんみりする話などバリエーションも様々だ。すぐに身近に有り得そうな有名どころの話はほとんど目を通し終えて、靈感のある人の話や田舎のホラーなどを読み漁ったが、神話関係については表面を齧った程度だ。

最初は口裂け女や人面犬を知っている程度の知識が、今となつてはアンダーグラウンドな掲示板でも語れるほどに詳しくなった。もしかすると、オカルトについて誰かしらと話すときには早口になつてしまふかもしれない。好きな話をするときは早口になる人が多いと聞いたことがある。それはなんだか恥ずかしいので、なるべくわかりやすく早口にならないよう日頃から気を付けることも意識しておこう。

俺は夢の中を歩いていた。幾度となく経験したことだ、まずは光がより強く輝いている方向を目指す。白い空間ではあるが、上下左右は存在している。試行錯誤を繰り返しているが、夢の中だからといって空を飛べるわけでもないらしい。

慣れてきたためか、守護スパゲッティと合流するのも段々と早くなつてきていた。俺の感覚だが、明らかに要した時間も短い。

それとも近くで待つていたのだろうか。

「麵を茹でるのです」

……それは言わないといけない聖句か何かなのか？

最初から傍にいれば俺も歩いて探す手間も、光に視界を潰される苦労もなくなるのだが。

「足を運んでいただいて申し訳なく。ただ、私も活動できるマグネタイトが足りていないのです」

守護スパゲッティが言うには、悪魔のエネルギーはマグネタイトという物質らしい。感情の変動によって生み出され、その起伏が大きい程により多く生成できるため、人間や悪魔が多く持っていることになるようだ。

そして高位の悪魔ほど量が多く、質も良いマグネタイトが必要になるとのことだ。マグネタイトが多量にあれば自身をより強い存在へと昇華できるのだろう、単純に他の悪魔を倒す理由へと繋がるのも分かる。

ここで疑問が湧く。俺は二週間ほどほったらかしにしていたのだが、その間はマグネタイトをどうしていたのだろうか。また、それ以前はどうしていたのか。そもそもここは夢で合っているのだろうか。

「その疑問についてお話を。まずここは貴方が思っている通り、夢の中です。そして貴方は現在、精神と魂のみの存在となっています」

俺の肉体はベッドで眠っていて、精神と魂のみの状態となっている。それが夢の中らしい。

脳が無いのにこうやって思考するのは何故か、答えは単純に精神と魂が脳の代わりをマグネタイトで作り出しているらしい。ただし、必要性を認識しないとそういつた“代わり”を作らないようだ。そして肉体と脳で理性を形作る。そのため、夢の中ではほとんどの人間が発露した精神の思うが儘に動くのだとか。脳が無いのに思うが儘という違和感。

また、物質と精神では互換性を持つ物と持たない物があるため、見える物や見えない物、感じる物、出来る物事が大きく変化すると言った。

「夢は意識から離れた状態、つまり無意識ですね。理性を司る肉体と離れているので精神と肉体が剥き出しとなっているといってもいいでしょう。感情の発露は現実より強いです。そのため、夢にはマグネタイトが漂っています。過ぎすだけなら問題ありません」

夢の中は、守護スバゲッティが存在しているだけならば問題のない量が人間から生成されているという。ただし、夢は広いので薄く広がってしまったているとも。

人間でいうところの酸素と水は十分だが、腹は膨れない状態らしい。二週間もそのような状態では耐えられないのではないかと思つたが、人間と悪魔では感覚が違うよう

だ。とはいえ、人間にも個性があるように、悪魔にも個性があるので一概に言いきれないようだ。

「あちらは物質世界である現実へと続いています。今の状態では互換性がないので詳細はわからないでしょう」

俺が来た方向、つまり後方を麺で出来た触手が指し示した。振り返れば無限にも思えるその果ては、徐々に暗くなつていて、輪郭がなく不安定だった。まるで夜空のように、小さな光がところどころ瞬いていた。

見ていると吸い込まれそうだった。きつと身を委ねれば、俺は目覚めるのだろうか。

「こちらは無意識です。より遠くへ進むには、より強い精神性が必要になります。先へ進む理由となる強い目的意識が必要、ということですよ」

守護スパゲッティが自身の後ろへと触手を指す。白い世界が無限に続いているように見えるが、奥へと向かうほどに眩い光に包まれているように思えた。遠くへと目を凝らす、何も見えない。強い目的意識という物が無い俺の限界なのかもしれない。

「無意識ですが、無限です。実際は有限ですが、人類規模の無意識が接続されている空間のため、人間の一生分を彷徨うだけなら無限とも言えるほどに広がっています。集合的無意識と呼ばれていますね」

ここは集合的無意識のようだ。無意識の領域が接続されている空間だったか。人類

規模もあり得るとされていたが、実際そうだと言われてもピンと来ないものだ。

「現実である意識側に近づくほどに物質的な距離を必要としません。自分の肉体と精神、魂に距離を感じる人間はほとんどいませんから。無意識は逆に物質的な距離に支配されます。この空間は共有している人類によって構成されているので、根底にある事実がより強く反映されるためです。意識は個々人で管理されますが、無意識は共有している事実を元に規定しているのですよ」

意識へと向かうほど、現実に近いほど、意識は自身の物だけになる。他人の感覚や意識などによって左右されないのだろう。

逆に無意識は、人類が共有する場であるため、無意識の根底に持つ常識などに支配されているということだろうか。『奥』とやらに進むほどに、物理法則に強く支配されるのかもしれない。しかし、正しい物理法則を人類のすべてが認識しているのだろうか。現在では世界の法則は数値化されているが、誰もが知っているわけではない。知ろうと思わなければ知識として根を張ることは無いし、全体から見れば事細かに学習できる環境にいる人間は少ない。そうになると、ある一点を境に劇的な変化をもたらすかもしれない。例えば自身の意識から十分に離れてしまった距離だとか。そこはもしかすると、無意識に刷り込まれている感覚的な物事のみが残る、いわゆる濾過されてしまった原始的な感覚だけの空間になっっている可能性も考えられる。

ここで守護スパゲッティはどこから来たのだろうかという疑問が一つ。こんな存在がごろごろ居たらぶつちやけ怖い。

「私はステイツ出身です。そしてこの空間をスーツと横移動して日本の意識が固まっている場所まで来たのです」

触手が横を指す。横移動で国や民族単位で構成された意識クラスタへと分け入ることができ、上下の階層で細かく調整が効き、最下層で個々人へと至るようだ。

巨大なクラスタでの移動は物理的な距離から大きく解法されるが、個々人へ近づくには物理的な距離が生じるとも。

つまるところ……。

「まあ、追々話しましょう。攻略本を読んでもゲームは上手になりません。貴方が踏み込んだらもつと詳しく調べるのもいいと思います。提案なのですがそろそろ悪魔と戦ってみませんか……」

「ここらへんですかね……」と呟くとともに、触手が上へと伸びていく。十メートルほど伸びただろうか、空間の揺らぎと言えはいいのか、蜃気楼のように揺らいでいる場所に触手が飲み込まれた。途切れずに先へ先へと続いているのか、守護スパゲッティは何

かを探すように伸ばした触手を元からくねくねと動かしている。

「あ、居ました。……で、これはその前準備です」

戻ってきた触手は、モザイクのような何かを絡めて戻ってきた。身をよじっているのか忙しく動いていて、ノイズのような奇声を発している。

話からすると、これが悪魔なのだろうか。

もつと生物的な姿をしていると思っていたのだが。

「悪魔を見る機能は退化していますが、防衛本能で見ようとしている齟齬が生じているためです。『靈感』や『第三の目』と呼ばれる感覚が目覚めないと人間には悪魔の姿は見えません。しかしそれらは物質世界で生きる現代の人間には不要となった感覚器官なのです。でも、貴方の意識が届く圏内にいて、悪魔も姿を現そうとしているから、強制的に他の器官が補っています。物質世界だったら感覚を同化させなければなりません。ここは唯識空間。触ってみれば徐々にわかります」

差し出されたモザイクに、恐る恐る触れる。緊張と恐怖で頭が真っ白になり、思考が固まっていはいはずなのに、自然と受け入れられそうだ。モザイクを差し出している守護スパゲッティは「生体マグネタイトおいしーです。おかわりください」ととぼけたことを呟いている。なんで俺のマグネタイト食つとんねん。

手がモフモフとした毛と暖かさを感じる。ゆっくりと撫でた毛並はあまりに心地良

かった。つい撫でるのを繰り返してしまふ。呼吸しているのか、僅かに上下していた。弱弱しく何かが腕に巻き付いた。指先にぎりぎりとした棘付いた感覚と、生暖かい粘つき。

そしてゴロゴロと音を立てた。

モザイクが晴れていく。ノイズが奔っていた鳴き声は嘘のように澄んでいた。

俺はアッシュグレイの仔猫を抱いていた。

猫じゃん。悪魔じゃないじゃん。

「ええ、猫です。同時に悪魔でもあります。夢の国に住む猫」

少し調べたことがある。なんだったか。夢の国の猫は決して……。

「殺してはならない、ですね。しかし夢の国から連れてきたわけではありません。迷い込んでいたのです」

国から抜け出したのだろうか、守護スパゲッティはそれも追々と流してしまった。スパゲッティのくせしてまるで流しそうめんのようだ（うまいこと言った）

「この猫のように、悪魔にだつて体はありません。マグネタイトを基礎として構成しています。しかし、人間の想像とはかけ離れた姿をしています。美しい姿、醜い姿」

異なる生き物なのだから、身体の構造も異なっている。目の前の守護スパゲッティが最たる例だ。奇怪で、興味深い生き物。

姿を捉えることは可能となった。

知識は得た。

そうなると、怖いのは力だ。

同時に気になるのも、その力。

「まだ怖いですか。でも気になりませんか。悪魔はどんな姿なのかって」

未知が恐怖心を煽り、好奇心で誘い込む。

俺の常識では存在しなかった悪魔、その形を見ることができるようになったのだ。

知識の中にだけ存在していた怪談を紐解く権利を得たのだ。

オカルトに傾倒しつつある俺が、この好奇心を振り払えるわけもなく。

腕の中に居た猫がにやあと鳴いた。

空飛ぶスパゲッティ・モンスター3

— 8 —

十本の麺によって構成された触手、二つのミートボール、そしてつぶらな瞳。そう、やつだ。

「麺を茹でるのです」

目覚めの開幕一発目に守護スパゲッティが漂っていた。知らない天井どころか知ってるパスタ。

まだ夢の中かと思い、確認しようとして気づく。夢と現実の違いがわからない。白だけの空間とは別に、確か自室に酷似した空間があったはずだ、そこでジュースを飲んでテレビを見たから覚えている。

そうなると俺は今寝てるのか、起きてるのか。

そうだ猫だ。猫が居なければ……どうなのだという話だ。あの猫は別の場所から引つ張ってきていた。守護スパゲッティの話ならば、別の単位クラスターとやらから来ているのだ。となると自力で移動できるのかもしれないし、そもそも最初はノイズのよ

うな姿だった。認識できるとも限らない。

「困惑していただけますね、悪くない感情です。ゲートパワーが貯蓄できるといふものです。ただ、話にならないのは困りますので、ここは現実だと教えておきましょう」

現実だと言われたら現実だと思えてきた。

確かに夢で目覚めるとか有り得ない。

落ち着いたー^^

「あ、吸いすぎました。……せつかくなのでこのマグネタイトも有難く。さて、夢と現実ですが、ぶつちやけると違いはあまりありません」

ええ……無いのか……。

夢と現実の違いがわからない地獄である『胡蝶の夢』状態になる可能性も出てきて、夢の中で感じなかった鼓動を強く感じた。そうだ、鼓動だ。

俺が生きている証は心臓にあつたんだ……。

「臓器は証左にはなりませんよ。夢でも現実でも必要とあらば補う器官や現象をマグネタイトで生成しますから」

マグネタイトってなんやねん……。

悪魔に餌付けするためのエネルギーじゃないんかおらあん……。

「悪魔に身体を与えるエネルギーですからね。情報に沿って形になる性質もあります。」

慣れれば夢と現実の認識を切り替えられるようになりますよ」

なんか君、詳しくない？

悪魔ってそんなに自身の周りの物事を解明したりするのか？

怪しくない???

「私の出身国ステイツでは研究が盛んです。論文件数はなんと世界一」

そんな例文みたいなこと言って誤魔化せると思ったのだろうか。俺は見た、触手のうちの一本を後ろに隠す挙動を。

国際社会の協調性を唱える前に米の国は単位を揃えろさつさと見せろおらあん！

「しようがないですね、でも覚えておいてください。強引な彼ピツピは彼女ピツピに嫌われますよ。逆に普段は強引だけど二人になると優しくするDVギャップによって依存させる手段もあります」

渋々といった雰囲気で差し出された本を受け取りながら思う。彼ピツピと彼女ピツピってなんなの……。

本を読もうとして首を傾げる。守護スパゲッティが持っていた本には『ゆめにつき』と題されていたのはいい。捲って中を確認するも、文字が書かれているのはわかるが読むことは出来ないのが問題だ。

これはあれだろうか、夢の中で聞いたあれだろうか。俺の本能が読もうとしてないという、あれ。

ページを開くたびにモザイクがかかっていたり、文字が揺らめいているように感じる。

「あれではありません。残念ながらレベルが足りない、というやつです。レベルが足りたら読めるようになります。なので今の貴方では読めないのです。たぶん本が読まれて噂されたら恥ずかしいって思っているのでしょうか」

さつきからキミなんなの……。

レベルとは、と疑問を浮かべると守護スパゲッティは「存在の強さのトータルです」と言った。能力面をわかりやすく数値化した平均とも言えるようだ。人間のみならず悪魔にもレベルは存在していて、脅威の判定に専ら利用されているとも教えてくれた。

「貴方に倒してもらいたい悪魔は1より下のレベルですね。そして人間もレベルは基本的に1です。レベル1が世界に存在していると約束される基準値なので、1より下となればふわふわとしたクラムボンのような存在ですよ。ぶち殺してかぶかぶ笑ってやりましょう」

生きている人間というのはそれだけで霊よりも強いのだという。笑っているのか、絡まっている麺とスパゲッティの触手が揺れていた。笑いどころはわからないが、命を賭

けるほどでもないことは理解できた。

「そろそろ悪魔と戦ってみませんか。オカルトの勉強したのでしょうか？　降霊術の一つや二つ、やってみたくありませんか？」

守護スパゲッティの言葉に乗せられるわけではないが、確かに試してみたいと思っていた知識もいくつかある。一般人が検証した結果、体調を崩すか何かしらに憑りつかれる程度だ。守護スパゲッティよりも奇妙な存在が降霊できるとは思えない。

やってみようか、と軽く決めて必要な道具を出力するためにパソコンで検索する。目当ての物を見つけたので、プリンターで印刷して準備完了。

「どんな降霊術を行うのですか」

こつくりさんだ。文字が羅列されたプリント用紙に硬貨を置く。

民俗学などで妖怪を研究する際の触りとしてぶち殺された悲しき降霊術であり、井上円了にネガティブに、そして柳田國男にポジティブに存在を承認されて原理を解体された。目に見えない怪奇で処理されるはずだったそれは事細かに切り刻まれることで要素を抽出された。心理状態、姿勢、不安定な道具……。最終的には科学的に証明できるとされたが、同時に降霊術としても活用できるのではないかという期待も現代まで生き残っている。

つまり、初心者のおぼには半端でちようどいいというわけだ。

「なるほど、最初にはちようどいい。……あの、ところでこれ、日本語じゃないでしょう。いいのでしょうか」

印刷した紙にはアラビア語が書かれている。それを丈夫な机の上に置き、お土産で貰った使い道のない外国の硬貨を配置。こつくりさんは挨拶をして呼び出し、疑問を答えさせ、術者が認識し、帰ってもらうまでが儀式のプロセスとなる。儀式が正しければ正しいほど、思っている通りのこつくりさんとなるし、手順通りやった状態でこちらの認識以上に逸れると強くなる。逆を言えばこちらが最初から逸らすほどに、こつくりさんと呼べる正しい儀式から外れていくのだ。

守護スパゲッティから悪魔の話聞いた際に、認識が強く影響することが全ての基礎となっていることがわかる。悪魔の元となるマグネタイトは情報を形にするうえに、弱い悪魔は噂にすら左右される。また、観測者である人間による認識が強く左右するようだ。そうなる、弱い悪魔よりもか弱いであろう降霊する悪魔未満の存在は、弱ければ弱いほど個々人に影響されやすいことになる。

「逆に降霊できない可能性も出てきませんか、それ」

そう、そこでパソコンを使うことにする。

一時期ほんのりと流行ったらしい『一人鬼ごっこ』と呼ばれる降霊術があるのだが、こ

アなファンによって学会が形成されていた。その報告によるとパソコンを繋いだまま同時に儀式を行うと降霊できる霊が強くなるという物だ。どうやらパソコンが疑似的な霊道の役目を果たすらしい。

今回は同時に儀式を行うのではなく、パソコンを掲示板で繋いでおくことで、霊道を繋げてそれぞれから霊現象を引き寄せることにした。掲示板の記事ごとで人気の格差も当然あり、常駐している人数で調整する。三人寄れば文殊の知恵、幾人寄れば霊現象、ということ。流石に全く霊的な存在はいないってこともないだろうし、いくらかは集まるはずだ。

部屋の四隅に盛り塩をすることで、簡易的な結界を生み出す。崩した儀式によって悪魔もどきが留まれずに拡散しないとも限らないので、その際に外に出て行かないように閉じ込めるためだ。除霊などに盛り塩は適していないのはもちろんのこと、変質した際には交換することも考慮する。

ということを思考したら守護スパゲッティは納得したようだった。失敗したら徐々に正規のこつくりさんへと近づければいいので問題はないはずだ。

「さあ、始めましょうか。真昼間に行く闇のゲームを！」

謎のテンションのままドヤ顔（表情はわからないが伝わってくる）で机に座った、と浮か浮いた守護スパゲッティの対面に俺も座る。パソコンはほどほどに会話が流れ

ている掲示板の話題を選ぶ。そして、互いの指（片方はスパゲッティの触手だが）を硬貨に乗せて、こつくりさんの儀式を行う。

薄めたカルピスのような儀式ではあるが、俺という人間がこつくりさんを認識して呼ぼうとしているうえに、本物の悪魔である守護スパゲッティが補助している。最低限は集まるだろう。

硬貨が動くこうとして、途中で止まる。文字に困ったのか、それとも鳥居の絵の両側にあるYES／NO枕の写真に混乱したのか。何処か生臭い。確か見えない物を見る必要あるのだったか。夢の中で掴んだコツを通じて視界を切り替えると、靄や霞のような物がふんわりと漂っているのが見える。僅かながら何らかの存在も感じられる。どうやら失敗ではないらしい。

「弱いですね。パソコンを通ってるのはわかりますけど、マグネタイトも上手く連結できてないのか途中で構成が途切れてます」

触手で漂っている靄をかき混ぜながら守護スパゲッティ「私は仙人ではないので霞を食べるつもりはありません」と付け加えた。パソコンの画面に目を凝らせば、ほんのりと緑色をした靄というか霞が放出されている。守護スパゲッティの言葉からすれば質は悪く、量も悪いようだ。とはいえ霊道になっっているようだし、そこから小数点程度のレベルを持った悪魔もどきを降霊することには成功した。ここから徐々に本物の儀式

へと近づけることで、調整を効かせつつ弱い悪魔を降霊させるようにする。

時間帯は深夜やそれに近い光量、現実から認識が減っている環境、不安定な感情によつて生成されるマグネタイト……。考えられる条件は多々あるが、紙に書かれた文字は最後に調整する部分だ。文字が理解できるほどに悪魔を認識してしまう。段階を踏んでステツプアップし、任意の悪魔を降霊させるまでを目標としよう。

「デビルスタリオン？ デビルメーカー？ デビルファーム？ まあなんでもいいので環境を変えて理想の悪魔にしましょう！」

守護スパゲッティのよくわからない言葉は無視し、儀式を繰り返す。徐々にこつくりさんらしさを取り戻しつつある謎儀式。靄だった物も集まってくれば緑の粘つく何かに机にへばりついていた。異臭がひどい。

「スライムですね。これはマグネタイトが足りない悪魔の姿なのです。見た目が悪いのは情報が揃っていないから。異臭がするのは正しい情報が欠落しているから。知能が低いのは情報が壊れているからです」

器も正しく構成されていないので、全身弱点という脆い状態のようだ。逆にマグネタイトを与えて姿を見てみたいという好奇心に駆られるのは俺だけだろうか。

「また拾ってきたのですか。ペットを飼うのは大変なんです。生き物だから感情だつ

であるし。元居た場所に捨ててきなさい」

大事に育てるから、と言えはいいのだろうか。最初のペット枠は守護スパゲッティなんだが。そもそも最初に居た場所はここだ。確かにパソコンを霊道にして色々な場所から掻き集めたが、さすがに送り返したら問題になりそうだ。

スライムに冷蔵庫から期限が近い卵を与えてみる。中身のみならず殻まで食べるとは中々の逸材だ。肉や魚、野菜をバランスよく食べさせると全てを一口で飲み込んだ。凄い食欲だ。納豆にチーズもいけるのか。生米まで……。

「楽しんでるようですが、おそらく期限は無いと思いますよ？ 足りないマグネタイトを補おうとしています、この部屋にある食材では心もとないのです」

スライムに見れば、奇声を上げながらパソコンを通じて集まっている緑の霧を一生懸命集めているようだった。やはり現状ではマグネタイトが足りていないようだ。

そうなると守護スパゲッティもマグネタイトが足りていない気がするのだが。

「確かに足りていません。夢から持ってきているのを使っているので赤字ですね。とはいえ死なれても困るので初回は顕現してないと不安なのです。ゲートパワーも使い切ってしまったているし、手際は良いので次回から居なくてもいいでしょうけど。うご……」

触手で頭を抱える守護スパゲッティ。やはりマグネタイトが足りていない様子だっ

た。悪魔は存在しているだけでマグネタイトが必要だというし。さらにゲートパワーにも使っているという話だ。現世と異界を繋ぐ力をゲートパワーと呼び、マグネタイトを使ったり、悪魔が現実を捻じ曲げることで高まるらしい。守護スパゲッティは夢と現実を繋ぐことでこちらに顔を出している状態だという。以前ジュースを飲んで、テレビを見た空間は俺の意識を介していたらしく、現実と異界の間のように、現実への干渉が弱い代わりに低燃費だったとか。

なるほど、そうなるとマグネタイトを集めるのが大事だな。フォアグラ式マグネタイト牧場とかどうだろうか。

「……なんです、語感からでもわかるその邪悪なマグネタイト収集方式は」

スライムを配置してマグネタイトを集めさせる。存在が不安定なので限界まで取り出すことなく集めてくれるだろう。そして頃合いを見計らって捌いて、マグネタイトを取り出すのだ。徐々に数を増やすことで収穫量も増えていくマグネタイトをベースにした第一次産業だ。

どうだ？

自信有り気にチラツツと視線を送りながら提案する。

「見よ、悪魔よ。これが人間の悪意です」

守護スパゲッティからそんな言葉とともに、とんでもねえ悪魔が居たものだ、という

雰囲気か漂ってきた。言葉をかけられたスライムも、マグネタイトバキュームを中断してマジかよ、という意味合いを含んだ奇声を発していた。

冗談でも酔狂でもない、軽く思いついた大真面目な案だ。パソコンの画面とスライムを増やすことで収穫量をアップさせ、なおかつ外出や就寝中も収集できる。考えるだけで利点だらけだ。なんと家で出たゴミとかも食べさせて処分できる。

「いや、全然良くないのですよ。悪魔は強さに拘りますから、マグネタイトを奪われて弱くされた恨みとか想像したくありません。スライムたちの憎悪によつて磨かれた異界とかできそうです。負のスパイラルから生まれる悪魔とかどれほど性格の悪い悪魔が来るかもわかりませんし。しかもこのスライムたちはパソコンを通して色々な場所から送られた思念の集合体ですので、容易く混ざり合えるので何が起きるかわかりませんよ。ということで却下です」

良い案だと思つたのだが、かなり不評だった。しようがないな、と諦めるとスライムも安心したのかパソコン前に戻っていった。

他にも思いつくが、スライム側の感情を考慮すると没にせざるを得ない物ばかりなので諦めた。我がままは良くないと思う。

仕方なく地道な方法を選ぶ。こつくりさんの儀式を正しく行うことにする。

「だがアラビア語にYES／NO枕です」

それな。

降霊するとスライムに吸い込まれ、それに耐えてこっくりさんとして俺たちの傍までたどり着いた悪魔もどきを待っているのがアラビア語が書かれた紙とYES/NO枕である。そして待ち受ける質問が「宇宙には地球上の存在以外に知的生命体はいるのか」「四文字はどこにいるのか」「人類は悪魔を殺して平気なのか」「なぜ戦うのか」「五万で水着BBちゃんが出るのか」など邪悪なる守護スパゲッティ問題が待ち受けているのだ。そして詰まっている間にラーメンを食べるかの如くスライムに吸われて吸収される。どんな気分か三十文字程度で教えてもらいたい物だ。

「とうとう普通のこっくりさんになりましたね」

目の前には正式なこっくりさん用の道具、日が暮れて夕焼けが差し込む逢魔が時の薄暗い部屋、不安定な机、そして守護スパゲッティとスライム、俺という術者。本格的なこっくりさんができるようになるとは感無量だ。アラビア文字やヘブライ、象形文字、楔文字、漢字、アルファベットなどが書かれた紙束は見なかったことにした。

段階を踏んだことで降霊のさじ加減もわかってきた。その副産物として現れた悪魔もどきも、スライムが美味しく食べたことで異臭が無くなり、体も緑から透明になりつつあった。確かパソコンを通じて集まった思念の集合体という話だったので、決まった

形は無いのかもしれない。

正しい手順で儀式を行うと、スパゲッティの触手とスライムの触手、そして俺の指によって支えられた硬貨が動き始めた。正式なこっくりさんによって浮遊霊のような下級霊がパソコン画面から飛び込んできた。そして玄関や窓からも弱い霊が集まり、複合体となった。動きが速く、空中を飛び回っている。見た感じでは動物霊のようだが、耳と尾があるくらいしか特徴が無い。

守護スパゲッティの触手が伸びると、宙を飛び回っていた動物霊は引裂かれた。半分はスパゲッティで出来た胴体へと取り込まれ、半分はスライムがむしゃぶりついていた。

「レベル1ですね。繰り返しれば悪くないマグネタイトになりそうですが」

それでもいいが、予想以上に守護スパゲッティが強かった。もつと格闘ゲーム的な苦戦を強いられるのか思ったが、レベル1でも触手で一撃とは。小数点のレベルでもスライムに吸い込まれる程度だったので問題は無いと理解していたが、これほどまで差があるならもつとステップアップしてもいいのかもしれない。

「いいですね、その調子です。私も下級の降霊術で召喚された悪魔には負けるつもりはないのです」

よし、それならルール違反だ。シンプルな話だが、降霊中にルール違反を犯しまくる。

それだけでこっくりさんの儀式によって呼び出した悪魔は強くなる。儀式中に硬貨から手を放すだとか、立ち上がるだとか、大声を出すだとか、そういう下地が全国的に出来ている。

「うおおおおお、私たちの戦いはこれからだ」

若干強くなった動物霊を空中で引裂きながら、守護スパゲッティが棒読みで言った。いや、おまえホントつえーわ。

これならあれをやるしかない。

スーパー悪魔対戦を。

「見イツケタ」と衣装箆筒を開いてきた調子に乗ったぬいぐるみの頭を掴み、床に叩きつける。俺が隠れていたのは単に儀式のためだ、途中で塩水は飲んだりうがいしたりした。ぬいぐるみが動こうともがくので、何度も繰り返す。

漸く止まったので少し上がった息を整えながら連れて行く。

手間をかけさせやがって雑魚が。

「ええ……」

困惑した様子の守護スパゲッティを引き連れて居間へと向かう。守護スパゲッティの触手にも、当然ぬいぐるみの姿。今行っていたのは一人鬼ごっこ、または一人かくれ

んぼという儀式だ。ぬいぐるみを鬼に見立て、手順を踏むことで降霊させる。実はこれ、かなり簡略化された呪術だ。ぬいぐるみを人間に見立て、呪いをかけるのだが、その際に呪わせる悪魔を降霊しているようだ。使う道具を生物の生に近づけることで、より強い呪いが発現する。さらに人間の髪や爪、血を使うことでさらに強くなる。段階を踏んで強化した呪いのぬいぐるみは、今まさに俺の手によって捕獲されていた。

居間は盛り塩結界によって有象無象の悪魔が閉じ込められている。その部屋に通ずる廊下では、スライムから透明の思念体へとランクアップしたペットがこっそりさんを行い、現れた動物霊を結界内へと放り込んでいた。ちなみにペットの名前は守護スパゲッティがユニコーンと名付けた。名前とは一体……。

さて、何をやっているのかと言うと、悪魔同士を一か所に閉じ込め、戦わせたり混ぜたりしている。マグネタイト量や感情の高まりによって悪魔はより強くなる。蠱毒でも表現すればいいのか、盛り塩結界に閉じ込められた悪魔は互いを食らい合い、混ぜり合っている。互いをよきライバルとして高め合うって素敵だな。

俺が掴んで離さないぬいぐるみと、守護スパゲッティに捕まっているぬいぐるみから恐怖の感情を薄らと感じた。悪魔も感情があるのだな、と思った。守護スパゲッティは感情豊かだから今更そんなことを考えるのもおかしいが。

「素晴らしいッ!!」やら「ハッピーバアアアアアスデイ!!」と叫びながら、守護スパゲッ

ティがぬいぐるみや浮遊霊を放り込む。結界内では食らい合い、混ざり合った悪魔が生まれようとしていた。盛り塩の色が凄まじい早さで黒くなっていく。

盛り塩が変質し、結界が溶けたことで顔や体が複数ある悪魔が飛び出してきた。醜悪な見た目だ。これではペットには向かないだろう。

「新しい悪魔の誕生ですよ!!」

そう守護スパゲッティは叫びながら、いや口は無いのだが、新しい悪魔を同じように引き千切った。悲鳴とともにばら撒かれる悪魔の肉片。踊り食いとばかりに貪る姿なきユニコーン（思念体）。

この悪魔たちには情緒というものが無いのだろうか……。

「え？ ペットにしたかったんですか？ 強さがまちまちのレギオンですけど、その中でも下級ですから意識も混ざって統合されていません。飼うには向いてませんよ？」
そうじゃなくて、手間暇かけたのだから戦闘の果てに倒したいというか。強敵を倒して覚醒とか夢がある。

「大した相手ではないですから、そんな期待しても意味ありませんでしたよ」

守護スパゲッティは俺ががっかりするようなことを呟いた。触手で引き千切ってばかりなので、基本的に俺は悪魔との対戦経験が不足している。精々が飛び回る動物霊を叩き落とし、憑依したぬいぐるみをアイアンクロウで戦意喪失させた程度だ。

警戒していた自分が馬鹿みたいに思えるというか、次から緊張感がなくなる可能性が出てくる。僅かな恐怖も知っておきたい。

「一応強い悪魔も用意できます。やりますか？」

僅かな恐怖なので、ほんのり強い程度が望ましい。

「いいでしょう。深淵をのぞく時、深淵もまたこちらをのぞいているのを忘れないでください」

いや、そういう危険な香りがするときは深淵から離れていきたいというのが本音だ。まだ悪魔と戦闘して一日目だ、優しく経験値を積ませてくれ。

守護スパゲッティは俺の考えを聞いているのかいないのか、反応はない。そのまま触手が本を取り出した。あれは朝見た『ゆめにつき』だ。

「夢の最奥から撒かれた種は根を張って意識を支配しています。この『ゆめにつき』は現実への小窓、夢との扉。夢から現実へと支配の根を引き剥がすことのできるフォルマです」

強い威圧感を本から感じる。ユニコーンも何かを感じたのか、俺にすり寄ってきていた。背を撫でて落ち着変えるのと同時に、自身も落ち着かせる。

これはあれだろう、ちよつと強い悪魔ではない。絶対に違う。

辞めたいが、守護スパゲッティには思いも言葉も届かない。もういい、盾になりそう

な机を構え、他にも机や大き目の鍋を転がしておく。

「ちなみに、私はあまり手伝えません」

本が黒い影を吐き出したのと同時に、守護スパゲッティが言った。本当にあまり手伝えないのか、触手だけが俺の背後から姿を見せている。

好き勝手しやがって、おまえぶち殺すぞ。

『我が汝だったのはじまりの心。汝が我だったゆめのシヘン。我々の可能性の始まり。しかし今は我の物だ。取り返せば良い……できるものなら』

守護スパゲッティの触手に似た黒い触手が絡み合った何かがそう言った。『ゆめにつき』が浮いていて、そこから黒い触手が伸びていた。見たことのある懐かしい姿だ。おぼろげで、不明瞭。記憶の底に沈む、今は忘れた夢の形のようにだった。

ゆつくりと本が閉じる。奥には真っ白な空間が見える。

それが開始の合図だった。黒い触手が千切れ、何かが動き出した。